

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 10 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2021～2023

課題番号：21K02166

研究課題名(和文) 教育と子どもの生活を支えるケアの葛藤の諸相：1930～50年代の生活教育を巡って

研究課題名(英文) Aspects of the conflict between education and care that supports children's lives: Seikatsu Kyoiku in the 1930s to 1950s

研究代表者

木村 元 (Kimura, Hajime)

青山学院大学・コミュニティ人間科学部・学部特任教授

研究者番号：60225050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、1930年代に勃興する生活教育のなかでも教育科学の影響を受けた教育を対象に、教育とケアの葛藤に注目するものである。教育の営為が「制作」と「過程」の枠組で総括されてきたこれまでの研究の到達点を押さえながら、その前提となる教育と生活(ケア)という枠組を加えて考察する。その際、生活教育論争に集約されてきた研究のスパンを延ばし、戦後の展開も含めた1930～50年代が戦争をまたぐ非連続性を認めながらも一つの連続した時期であると把握して、社会史的な視野を持ってアプローチする。これらの取り組みは、大きな社会変動にある現代社会の教育問題を歴史的に対象化する教育史像の構築をはかる作業の一環である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、戦中戦後にわたって展開した生活教育の実践の場や内容が変していく状況を押さえ、子どもをケアすることと学力をつけることとの両者の間にある葛藤と矛盾について検討することで、1930年代以降の学校の課題を教育とケアの関係のなかでとらえるための視点を提出したことにある。そのうえで、戦後の教育と社会の関係史の展開を3期に分けてとらえ、高度成長期を迎えて沈潜していく教育とケアをめぐる問題構成が、教育的な実践を福祉領域に埋め込んだ生活困窮者自立支援法の学習支援問題など21世紀に入ってから教育と福祉の関係のなかで、再び顕在化してきている点を指摘したことに社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on the conflict between education and care in life education, which emerged in the 1930s and was influenced by the educational sciences. While keeping in mind the research results of the past studies that have summarized educational activities within the framework of "Poiesis" and "Praxis" we will add the framework of education and care that is the premise for this study. In doing so, we will extend the span of research that has been concentrated on the life education controversy, and approach it from a sociohistorical perspective, understanding the 1930s to 1950s, including postwar developments, as one continuous period, while acknowledging discontinuities that straddle the war. These efforts are part of our work to construct an image of the history of education that historically targets educational issues in contemporary society, which is undergoing major social changes.

研究分野：教育学

キーワード：生活教育 ケア ペダゴジー 学校 社会変動 生活綴方 教育科学

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

生活困窮者自立支援法に伴う学習支援は、貧困の連鎖を断ち切るための重要な施策として位置づけがなされているが、そこにみられる福祉と教育の結合は、対立を含む葛藤を孕むものでもある。それは、「よりよく」を目指そうとする教育と、「そのままである」ことを価値とする福祉の論理に基づく介入行為の性格の違いに起因しており、社会のあり方や両者の歴史的な位置づけとも関連する。その意味で歴史的研究が課題とされるが、上述した観点からのアプローチは手薄な状況にある。

本研究では、1930年代に隆盛する生活教育にこうした葛藤を捉えようとした。その際、1930年代のみならず学校から仕事への移行関係などを支えた社会史的な状況を踏まえて、戦後の展開も視野に入れながら1930～50年代を連続として押さえた。この時代を連続として捉える見方はこれまでなかったわけではないが、戦後の展開の中で本格的に位置づける作業とはなっていなかった。なかでも教育の営みを成り立たせるためのケアとケア自体との関係を媒介させながら生活世界の変容に注目して、教育とケアの関係を検討する試みにはいたっていない。

本研究が対象とする教育科学運動と生活綴方(「特に北方性教育」を対象とする)の遭遇を1930年代以降新しい段階に入る教育とケアをめぐる諸問題の起点として捉える見方はこれまでなかったといえる。

2. 研究の目的

本研究は、生活を課題とすることと学力をつけることがもつ、ある種の逆説を含む問題について、生活教育の担い手たちのライフコースを踏まえて考察する。これを中核的な問いにもち、1930年代以降新しい段階に入る教育とケアをめぐる葛藤(原理的には“よりよくする”働きかけである教育と“そのままである”ことを価値とするケアの論理の間にある葛藤)と課題を見いだそうとするものである。今日に至るまでの視野を持ちながら、戦中戦後にわたって生活教育の実践の場や内容が変容していく状況をトータルに捉えるための基盤づくりを試みる。学校という枠内での狭義のペダゴジーの変容にとどまらない生活教育の展開を射程に、社会変動のなかで教育がどのように変貌していくか。あるいは内容の強調点が移行していくのか。その内在的な変化を引き起こす源はどのようなものであるか。これらの解明のための関連資料の整理も重視した基礎研究である。

3. 研究の方法

生活教育のペダゴジーを教育制度の社会史という枠組みを用いて検討する。すなわち、ペダゴジックな関係を、学校という制度が産出する人口動態や、学校の外部システムとの往還およびそれを媒介とした内部関係の組み替えに留意しつつ、子どものあり方や生活(教育)課題の解明の試みを教える側(教師)の反省に注目して描きだす。その際、ペダゴジーの類型をつくり、分析の概念を明確にする。実際に教える層以外に、教師、生徒、教材の関係を組織するレベルの層、それが教育であるかどうかを照らす層、子ども世代と大人世代の関係の現れの層、さらに知識の再文脈化の層等を想定している。さらに、学校存続のための新たな課題について、学校と学校外(学校の仕事とそれ以外)との区別をするために引かれた境界線の存在に注目する。

4. 研究成果

(1) 研究の水準と課題の確認。

1930年代に勃興する生活教育のなかで戦後にも影響を与える教育に関して、これまでの研究を整理し課題を確認した。

まず、これまでの研究動向の整理と位置づけを書評や図書紹介などを通して行った。教育科学研究運動に関する研究の動向について『総力戦体制下の<教育科学研究会>』の検討を通して1990年代後半の研究の水準が依然課題となっている状況を確認した。すなわち、戦時動員体制の比較史的な研究、日本経済システム研究、それらを実証史的の立場から批判的に捉えた現代史研究を踏まえた。加えて、戦時体制分析の固有性を確保しながら、階級対立の政治・経済史研究という次元のみならず、人間の生や死を土台とした労働や生活のあり方への対応を含めた社会史研究の提示を踏まえて、教育史研究の課題を設定する必要性を示した。生活綴方の研究動向について、日本国内での議論に終始していたこれまでの生活綴方研究の状況を相対化する知見を得た。平凡社の『世界の子ども』プロジェクトを分析した『生活綴方で編む「戦後史」』の検討を通して、母語によって日常の子どもの生活をそのまま描くという生活綴方の前提である「ありのまま」や「日常の生活」が自明ではないことを確認したうえで、「子どもの生活の事実」が孕んだ葛藤の存在を描き出すことの研究史のなかでの意味を指摘した。

さらに、教育の事実を掘り下げるための一つの切口である「教育の経験」をどのように豊かにするかについて検討を行った。本研究を支える基礎ともなった筆者編著『境界線の学校史』の検討を近・現代史・経済史研究者を交えて行った。教育の実践の制度的な制約を捉えるだけでなく、「学校と社会の関係史」の中に制度的な制約を位置づけると同時に、その中に存在するメタ・ペダゴジーの解析がなされる必要があることを指摘した。

(2) 生活の営為と公教育の関係を捉えだす枠組みの設定と基礎カテゴリーの検討。

公教育で何を保障するかについて、こんにちの社会変動を把握しその中で教育目標を設定するための基本的視座として人が生存するための営為の基底にある<つながる・はたらく・おさめる>というコンセプトを抽出し検討しながら、教育とケアとの関係を歴史的に押さえるためのカテゴリーと視点について考察した。

さらに、基礎カテゴリーの検討やその歴史的な位置づけに関して検討を行った。その成果の一部として教育哲学・教育史の研究の今日的な水準を踏まえながら生活綴方についての定義を教育哲学会編『教育哲学事典』(2023年8月刊行)で行った。さらに、公教育、ペダゴジーの展開に関する試論を関連雑誌に発表し、1930-50年代の研究の意義づけを行った。作業のなかで、教育課程の基礎的なカテゴリーとして、履修主義と修得主義さらに課程主義と年齢主義など、何を教えるかの枠組みの検討が今日的課題であることを把握した。現代の教育課程改革の議論のなかで基礎カテゴリーの歴史的な性格が十分に共有されていない状況について、中教審義務教育の在り方ワーキンググループでも指摘の報告を行った。これらの本格的な検討については課題とした。

(3) 1930年代～50年代に隆盛する生活綴方の実践の、その後の展開を踏まえた検討。

北方教師に加えて、無着成恭を対象の中心に取り上げた。無着の実践について、「戦後」を絶対的契機とした「山びこ学校」を起点とし、「続・山びこ学校」「詩の授業」の教育がマ

イルストーンとして刻まれていると捉え、それらが戦後の日本が直面した民主的な社会の構築、豊かな経済の実現、また豊かな心の醸成という時代ごとの教育の課題に対応するものとなっている点を指摘した。さらに、それは社会の変化に対応するだけではなく、無着が実現しようとした「人間の教育」を貫徹するための課題と格闘し、学校という場での教育の可能性と限界を見極めようとした試みであることを示した。戦後の日本の教育の背骨にあたる義務教育は、就学（学校に行くこと）によって果たされるものとされ、その充実が教育を受ける権利の保障とされてきた。しかし、フリースクールや広域性の通信高等学校あるいはコロナ禍を契機としたオンライン授業など多様な学びの場が生まれつつあり、学校に行くこと自体が問われるなかで、無着の戦後の歩みは学校に行くことの意味を問う重要な経験であることを提示した。無着の基盤にある宗教観に根ざした実践であったことも推察されるが、宗教とペダゴジーの関係の研究は課題とした。

（４）教育の社会史的基盤を押さえるための基本情報の整理・検討。

1930～50年代のみならず、本研究は教育と社会の関係を押さえる幅広い資料の収集を基盤とするものであり、各時代の関係資料をもとにした研究のフレームづくりのための情報の集積と整理を介した知見を得た。なかでも日本の「学校から仕事への移行」の形成がなされた時期の学校と社会に関する基本資料の整理・検討を進め、研究の協力者である丸山剛史氏の助力をえて成果の一端としてクレス出版より文献資料集成の第1期、第2期にわけて刊行を行うことができた。2022年度には、制度を支えた諸団体、具体的なモデルを提示した学校や実践の動向ならびに、社会の変動に独自に対応した学校の営みが分かる資料集を、2023年度は、「学校から仕事への移行」の制度を支えた諸団体などの具体的なモデルを提示した学校や実践の動向、ならびに社会の変動に独自に対応した学校の営みが分かる資料集を刊行した。

研究実施にあたって研究の協力者として丸山剛史（宇都宮大学）、江口怜（摂南大学）、中田康彦（一橋大学）の助力をえた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 木村元、神代健彦、江口怜、呉永鎬 | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 「教育の経験」を問い直すために：大門正克氏の『境界線の学校史』書評への応答 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 <教育と社会>研究 | 6. 最初と最後の頁 23 - 28 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名 木村元 | 4. 巻 40 |
| 2. 論文標題 書評 金智恩著『総力戦体制化の<教育科学研究会> - 生活教育とカリキュラムの再編成』を読む：1990年代以降の教科研究の課題に照らして | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本教育史研究 | 6. 最初と最後の頁 155 - 161 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 木村元 | 4. 巻 64 |
| 2. 論文標題 図書紹介 駒込武編著『生活綴方で編む「戦後史」 - <冷戦>と<越境>の1950年代』 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 日本の教育史学 | 6. 最初と最後の頁 163 - 165 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|----------------------|
| 1. 著者名 木村元、江口怜、濱沖、敢太郎、呉永鎬、神代健彦、松田洋介、山田宏、前田晶子 | 4. 巻 31 |
| 2. 論文標題 座談会「境界線の学校史－戦後日本の学校化社会の周縁と周辺」の意図と到達点 | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 <教育と社会>研究 | 6. 最初と最後の頁 3 - 17 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 木村元 | 4. 巻 657 |
| 2. 論文標題 問われる公教育の基盤 技術革新のインパクト | 5. 発行年 2021年 |
| 3. 雑誌名 教職研修 | 6. 最初と最後の頁 108-109 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 木村元 | 4. 巻 658 |
| 2. 論文標題 公教育の責任をめぐって 技術革新のインパクトが浮かびあがらせているもの | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 教職研修 | 6. 最初と最後の頁 108 109 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 木村元 | 4. 巻 137 (11) |
| 2. 論文標題 戦後教育の羅針盤となった「山びこ学校」 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 中央公論 | 6. 最初と最後の頁 180 - 187 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計1件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|--------------------------|
| 1. 発表者名 木村元 |
| 2. 発表標題 教育と社会の学を振り返って |
| 3. 学会等名 一橋大学 |
| 4. 発表年 2023年 |

〔図書〕 計4件

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 木村元、長谷川裕、石井英真、青木利夫、小林千枝子、永田和寛、河原尚武、西岡加名恵、斉藤里美、松田洋介、本庄恵、川地亜弥子、銚山泰弘、平岡さつき、久保田眞、川口広美、岡田了祐、福井駿、木村裕、松下佳代 | 4. 発行年 2021年 |
| 2. 出版社 日本標準 | 5. 総ページ数 280 |
| 3. 書名 つながる・はたらく・おさめる の教育学ー 社会変動と教育目標：終章2 教育目標の論点と課題(木村元) | |

| | |
|--|------------------|
| 1. 著者名 木村元（監修、編集）、丸山剛史（編集） | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 クレス出版 | 5. 総ページ数 2282 |
| 3. 書名 『資料集成<学校から仕事への移行>の形成：日本の制度・実践・メディア 第 期 制度・政策関係編』全5巻 | |

| | |
|---------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 木村元、Yim, Kyung Taek訳者 | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 Nulminbooks社 | 5. 総ページ数 213 |
| 3. 書名 学校の戦後史(韓国語版) | |

| | |
|---|------------------|
| 1. 著者名 木村元（監修、編集）、丸山剛史（編集） | 4. 発行年 2023年 |
| 2. 出版社 クレス出版 | 5. 総ページ数 2727 |
| 3. 書名 『文献資料集成<学校から仕事への移行>の形成：日本の制度・実践・メディア 第 期 学校職業指導の諸相』全4巻 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | | | |
|--|---------------------------|-----------------------|----|
| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|--|---------------------------|-----------------------|----|

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|